

高齢者への虐待問題を考える

親と適切な距離を保つ

高齢者への虐待のほとんどの場合、加害者は家族だ。

加害者の六割から七割が男性で、なかでも多いのが、実母を虐待する息子だという。なぜ、そのようなケースが後を絶たないのか。解決の具体策は？

介護の専門家、川内潤さんに聞いた。

NPO「となりのかいご」代表理事

川内 潤

●かわうち・じゅん 1980年生まれ。上智大学文学部社会福祉学科卒業。老人ホーム紹介事業、外資系コンサル会社、在宅・施設介護職員を経て、2008年に市民団体「となりのかいご」設立。14年に「となりのかいご」をNPO法人化、代表理事に就任。

「生計が一緒」は難しい

——高齢者への虐待はいづころから社会問題化したのでしょうか。

高齢者の虐待は、ずっと以前から存在はしていたのだと思います。ただ、それが社会的な問題として明るみに出たのは、二〇〇六年に高齢者虐待防止法が施行されていますので、

その頃だと言えると思います。

この時から国は統計を取り始めています。虐待件数は一度下がった年がありましたが、それは統計の取り方を変えた年で、今日まで増加の一端をたどっていると言えるでしょう。ただし、これは高齢者が虐待を受けるリスクが高まっているというよりは、母数が圧倒的に増えてきたということです。

このような社会状況にありながら、高齢者虐待に対する予防策が、具体的に明示されていないので、根本的な解決がなされていないというのが現状だと思います。

——高齢者に対する虐待とは具体的にどんなものがあるのでしょうか。基本的には身体的虐待、心理的虐待、金銭的虐待、性的虐待、ネグレクト（介護放棄）があります。身体

的虐待は押さえつけたり、殴ったり、といったいわゆる暴力的な行為です。心理的な虐待は高齢者に対して威嚇したり、脅したり、怒鳴ったり、あるいは尊厳を傷つけるような言葉を吐いたりするような行為。金銭的な虐待とは、高齢者本人の金銭を家族が同意なく使っているような状態です。

ったり、家では服を着せなかったりするケースもあります。ネグレクトはいわゆる「無視」「放置」をすることです。自分では食事が作れないのは明らかなのに食事を作らないとか、排せつが自分でできなくても処置しないなど。介護、医療につながらないのもネグレクトの一つです。

このような話をすると、読者は、「高齢者に対してなんてひどいことを」と思われるかもしれませんが、でも、その虐待する人を責めても何の解決策にもつながりませんし、虐待がなくなることはありません。

難しいのは生計を一緒にしている場合ですね。どこまで本人が負担すべきかというのは、家庭によって違います。それから、離れて暮らしているも、子どもに来てほしいからお金をあげたりするケース。虐待と認められるケースでは、家族は裕福に暮らしているのに、本人は極端に粗末な生活を強いられている場合や、脅迫されて応じているケースですが、なかなか見分けが難しいですね。

性的虐待は、裸で外に出してしま

かがですか？ 家族なら文句の一つや二つは言いたくなるのではないのでしょうか。仮に、認知症なのだから仕方ないと、介護する家族が我慢を続けてらどうでしょう。家族のほうも参ってしまいます。裸にしてしまうケースも、排せつがうまくできなくて、イラ立ち、思わずやってしまったのかもしれない。

母の「老い」を受け入れない息子

実は、高齢者虐待の加害者のほとんどが家族なのです。家族は、家族ならではの愛情があるからこそ、親や配偶者が、元氣なころの姿でなくなることを受け入れられないのです。データを紹介しましょう。現在、家族介護を主に担っているのは、女性七割、男性三割です。ところが、虐待するのは男性六〇七割、女性は

三〇四割。圧倒的に虐待するのは男性が多い。しかも息子が実母を虐待するケースがダントツで多いのです。息子とその母親という関係は特別で、息子にとって心理的な「安全基地」が母親です。どんな状況であっても最終的に受け入れてくれる、息子にとって母親とはそういう存在な人として成長し、経歴を積み上げ、社会的な存在となっていく。その母親が介護が必要な状態になるということは、土台がくずれてしまうことなんです。

身体的に動けなくなる、認知症になつてさまざまなことがわからなくなる、そういう母親を直視することは、息子にとっては、とても難しい。私自身に置き換えても、受け入れることは難しいと容易に想像できません。そのくらい息子にとって母親は大

す。

いずれにしても、社会の中で努力して頑張ってきた人ほど、親の介護も頑張ってしまう。自分が介護に対して努力することが、親を大事にすることだと思いきや、親がちなのです。

けれども無理をした結果、家族関係が壊れる。一度壊れてしまうと、家族に「替え」はききませんから、修復もなかなか難しい。

それぞれの人生を第一に考える

——親孝行だと思つてやったことなのに、誰も幸せになつていない状態なのですね。

親孝行とは、おむつを替えたり、食事や入浴の世話をすることだけではありません。それをしないことは「楽をしている」ということでもあ

きな存在です。だから何とか元に戻したい、元気だったころの母親に戻ってほしいと期待します。そして大事な人だからこそ、自分で介護したいとも思うのです。

ところが高齢者の介護は、介護者がどんなに頑張つても、介護される人の老いは進み、確実に死に向かつていくものですから、元氣なころに戻すことはありません。だから傷つき、感情的になる。そしてうまくいかないのは母親のせいだと怒る——そういう悪循環が生まれるのです。

特に、社会に出て働いている世代の男性だと、目標に向かって努力すれば成果はあがると考えがちで、母親の介護に関しても同じような思考に陥つてしまい、うまくいかない行き場のない怒りを一番ぶつけてはいけない母親に向けてしまう。

一方、高齢の母の気持ちはどうでもありません。基本は、まず自分の人生をしつかりと大切に生きることなのです。私が生まれた一九八〇年は、七・

四人のうちの一人が高齢者を抱える時代でした。しかし今は二人に一人が高齢者を抱えています。昔ながらの長屋に住み、そこには多くの人がいて、一人の高齢者をかわるがわる介護する時代ではありません。

介護期間も長期化していますし、医療の発達で介護に高度な技術が必要になる場合もあります。一人や二人の肉親で見ていくことなど到底できない状態だということを、まずは理解してもらいたいと思います。

環境は昔と違うのに、昔のように肉親だけで無理に引き受けようとすれば、どこかでひずみが生まれ、その被害を受けるのは自分の愛する親や配偶者になってしまうのです。

しょう。息子、あるいは娘に責められたり、暴力を振るわれたりしたら、心に相当な傷を負うでしょう。年老いて、まさか自分の子どもにそんなことをされるなんて、とんでもなくつらい経験ですね。

誰も望んでいないのに、今、このような状況に置かれている人がとても多いのです。

次に多いのは、夫が妻を介護する場合に起きる、相手のためにというより、自分のやりたい介護になるというケースです。それでうまくいかない相手を責めてしまう。

一方、女性は、男性ほど深刻な虐待をする状況になるケースは少ないのですが、女性も社会的に活躍することが多くなり、「努力して結果を求める」という男性的な思考にとらわれる人も増えていきますので、そのあたりは注意が必要だと感じていま

私は企業などで親を介護している世代を対象にした講座を開く機会があるのですが、介護離職はしてはいけないと伝えていきます。

今は、退職後の六十代、七十代の方で親を介護している方もたくさんいます。第一線を退いた方たちも、今の趣味や生きがいとしてやっていることは、やめないでほしい。まずは自分の生活をしっかりとさせ、そのうえで肉親の介護とどう向き合うかを考えてほしいのです。

親は子どもの幸せを祈っているものです。親も、倒れた直後は自分自身も不安になつて、「そばにいてくれたら安心」とか、「一緒に暮らしたい」と言うかもしれません。けれども、いくらそばにいても、離職して不安を抱えている子どもを目の前にして、うれしいはずがありません。ましてやそのイライラをぶつ

けられたら親は委縮してしまってしまう。そんな思いをしてまで子どもに介護してもらいたいですか？——では、どうしたらいいのでしょうか。

すでに自立した親子が、一緒にいることが必ずしも幸せとは限りません。適切な親子の距離はどこか、どのような状態であれば親をかけがえない愛おしい存在と思えるのかを考えてほしいと思います。

つまり、いかにして親と適切な距離を保てるかが大事だと思います。家族の距離感はそのそれぞれでしょうから、今の生活を壊さずにできる範囲のことをやればいいのです。

介護は基本的に自立支援です。できることは自分でやってみようのが基本。ですが、介護のプロの私でも家族介護は難しいものです。たとえば親と住んでいて、父親から「リモ

いのでしょうか？

離れて暮らしている両親の片方に介護が必要な状態になったとき、たとえば母親が父親を見ていたとしましょう。親に電話した際、母親が疲れているなど感じたなら、両親が住んでいる地域の地域包括支援センターにあなたが親の承諾なく、相談することができません。

親は、子どもの前では無理をしがちです。「お父さんは、お母さんが元気な間は見ているから大丈夫」などと言ったりします。けれども介護が長期にわたっていたり、母親が自分自身の時間をとれていないようなら、共倒れを防ぐためにも、すみやかにケアマネージャー（以下、ケアマネ）に電話して相談してよいと思います。

一人暮らしの親に認知症が疑われることがありますね。職場に何十回

も電話をしてくるとか。そういう場合も叱ったり、怒鳴り返したりするのはなく、親が住んでいる地域の地域包括支援センターに相談してほしいと思います。

相談する際の注意事項ですが、まず、自分の困りごとと親の困りごとを分けて伝えてほしいですね。ケアマネは親の困りごとを解決してくれるために動いてくれます。「認知症になって、卵を毎日買ってきて困っている」——これは、相談者の困りごとです。

「卵を毎日買ってきて、卵ばかり食べて栄養が偏ってしまおう」「冷蔵庫にある古い腐った卵を食べてしまおう可能性がある」「卵を買いすぎて金銭的に困窮している」——これは本人の困りごとです。

——なるほど。つい、自分が困っていることを相談してしまいがちです

コンを取ってくれ」と言われたら、どうしますか？「自分でできるでしょう」と返したらギスギスしますね。普通なら取って渡してしまおうでしょう。そうやって食事も作ってあげる、食べさせてあげる、そのうち先回りして何でもやってあげるようになる。すると本人が持っていた力をどんどん奪ってしまおう。かえって親の老いを加速させてしまうこともあります。介護職なら違う対応ができることができます。

もちろん、介護職に「丸投げ」してしまえばいいというものでもありません。冷静で適切な判断ができる第三者の手を借りる。そのための手段を知っておくことが大事なのです。

家族にしかできないこともある

——具体的にはどのようにすればよ

が、きちんとわけて伝えることが大事なんです。

子どもの不安と、親の不安は違うものなのですが、一緒になってしまいい、食い違いが生じることがよくあります。

会社に電話をかけてくるというのも、子どもの困りごとですね。認知症があつて子どもに何度も電話してくるのは、何らかの不安があるからなんです。

ケアマネに「何とか電話をやめさせてくれ」と頼むのではなく、本人の不安はどこにあるのか一緒に考えることが大切です。認知症の方は、自分が電話を掛けたことを忘れても、息子に怒られたという感情的な思いだけは残るのです。だから、不安になつてまたかけてしまう。本人に幻覚がある場合もありますし、その原因は様々です。

その原因をケアマネと相談しながら、それとは別に、子どもが困っている職場への電話についてのように対応していけばよいのかを相談して決めるのがよいかと思えます。原因がわからないのに、電話をやめさせるだけでは、本人の不安はなくなりません。

現在の状況を客観的に見る立場の人が絶対に必要なんです。家族では、客観的に判断できません。一緒に住んでいる家族と、そうでない家族の意見が違うのも、ある意味当然で、どちらが正しいというわけではありません。

一方で、家族には、これまでの生活歴、本人が何を大切にして生きてきたのかということ伝えていくという大事な役割があります。

ケアマネは介護に関しての知識はありますが、本人がどんな人生を歩

んできたのか、何を大事にしてきたのかということはありません。本人はもちろんです、本人が認知症などによって伝えることが難しい場合は、ぜひご家族の方がしっかりと伝えてほしいと思います。それによって、何を重視して生活を支援していくのかというプラン作成に影響します。

家族とケアマネはよきパートナーとして一緒に考えていくというスタンスが大事なのです。働く世代の方によく話をするのは、親孝行したいのなら、介護離職をするのではなく、今まで社会の中で培ってきたマネジメント能力を発揮してほしいと伝えられています。

親も子もそれぞれの生活を大切にしながら、お互いが思いやれる位置にいることが、大事なのではないかと思えます。

することも大切です。

一方、遠方に住んでいる、あるいは施設に入所しているという方も多いでしょう。これまで頻繁に面会に行っていた方は心配が募るのはよくわかります。けれども、施設の職員や訪問介護の方たちも、今は神経をすり減らしながら懸命に取り組んでいますから、面会はこの時期は控えたほうがいいでしょう。心配なのはわかりますが、何度も施設に電話したりするのも、先方の手を煩わせてしまいます。

このような状況のなかにあってもできることはあると思います。むしろ普段できないことをやってみるといいのかもしれないと思います。

たとえば、手紙を書くということ。手紙を書くとなると、振り返る作業も必要ですね。普段なら、会いに来ているのでわざわざ言葉にしないこ

想うことを、言葉で伝える

——新型コロナウイルス感染拡大で地域間の行き来が難しくなったり、施設にいる親と会えなかったり、あるいは、デイサービスを利用していた人が利用できなくなったり、いろいろな場面で支障をきたしている方も多くいます。

そうですね。まず、同居されたり、独居の方でデイなどを利用していただ方は、地域にもよりますが、施設が利用を制限しない限り、自粛しなくてもいいのかなと思います。高齢者にとつて、運動不足によりフレイル（*）の状態に少しでも近づくと寝たきりになったり、認知症が進んだり、生活の質がぐっと落ちてしまいます。感染症を予防するのと同じくらい大事なことです。施設が感染症

とでも、しっかりと言葉にして伝えることができる。それは相手にとつても、いつでも読めるし、何度でも読めるので、とてもいいと思います。以前、施設の活動で入居者が家族に手紙を書くという企画がありました。その時、多くの人が家族（子ども）の幸せを願っているというようなことを書いていたんですね。施設にいる方はさみしさや辛さもあると思います。それでも、そうした愚痴ではなくて、相手を思いやる言葉をつづっているのはとても印象的でした。手紙は相手を想う気持ちを伝えることができると思います。

介護スタッフに改めて感謝を

——施設で働く職員の方も今はたいへんな状態ですね。

そうですね。介護職のもとには、

対策をしっかりと行っていて、運営しているのであれば、無理に休む必要もないと思います。

一方、デイなどがお休みになつてしまい、自宅で看なければならぬ状況の方もいるかと思えます。長期化すれば、お互いストレスもたまります。デイに行っていたときは運動や、レクリエーションをやっていたのだから、家でもやらなくては、とあまり神経質にならなくてもいいと思います。

高齢者のいない家族でも、在宅勤務や休校となつて家族がひしめきあっている、ギスギスしたりイライラしたりすることはありますね。それと同じで、程よい距離を保つ。よい親子関係を維持できる距離で過ごすことも今の時期は大切です。そうだけでなく同居の場合は介護負担が大きくなっています。接触を少なく

「コロナにかかったらどう責任をとるのか」というようななきつ言葉で責める家族もいます。介護職は真面目なので、正面から受け止めて悩んで疲弊してしまう人も多いのです。

今は、そうした心ない言葉は「家族も心配でそんな言葉になつてしまうのだ」と割り切つて、聞き流して、様々な要望に対して、無理に解決策を求めなくてもいいと思います。

ご家族の方にもぜひ、こんな時だからこそ、介護職の方に改めて感謝の気持ちを言葉にして伝えてほしいと思います。訪問介護に来てくれたら「こんな時にもきてくれてありがとうございます」とか、施設にいる家族だけでなく、職員の方たちへの手紙を添えてみるのか。そうした感謝の気持ちは、介護職の人たちを元気づける源になると思います。

*フレイル 加齢とともに運動機能や認知機能が低下してきた状態。要介護に至る前の状態と位置づけられ、日本老年医学会が frailty（虚弱）の訳として2014年に提唱した語。